

幼年部会

柿田 比佐子

乳・幼児教育に大きな転換点が…

「区立千駄谷幼稚園」と「区立千駄谷保育園」は、幼稚園・保育園の認可を残したまま、幼保一元化施設「千駄谷なかよし園」として平成二三年四月に開園しました。合同行事や異年齢交流を進め、幼稚園と保育園の一体的な運営を行っています。

千駄谷幼稚園では、平成二三年度四月から預かり保育・給食を実施し、保護者が就労しているお子さんも、就労していないお子さんも受け入れます。千駄ヶ谷保育園の園児は、四歳になると千駄谷幼稚園児になります。

(区のホームページより)

私の勤めていた園では、夏に保育園との併合案が出され、翌四月から実施となった。三歳児は保育園籍、四、五歳児は幼稚園籍という同じ施設内に保育園と幼

稚園が同居することになったが、その予算の配分とか、幼稚園教諭と保育士との連携等内容がはつきりしないまま工事が進められた。大規模な工事ができる夏休みは過ぎてしまっていたので、園児が生活する傍らで給食室を新たに作ったり、トイレを三歳が使えるように改造したりと、子どもたちは保育室を転々とする流浪の民状態で大規模な工事が進められた。

定員については、保育園定員と幼稚園に分かれて募集することになった。幼稚園枠の入園は一〇名ということが伝えられ、入れない幼児が出るのではないかと不安が保護者に広がった。幸いその年度は一〇名でも大丈夫だったのだが、入園希望者は年によって数が上下す

るので、一〇名という枠があると保育園の待機児を解消するために、幼稚園に入れない子どもがでてしまうのではないかと思える。また最大の問題点は、幼稚園と保育園がいきなり同じ場所で保育することだ。乳・幼児の保育といっても、もっている文化は大きく違う。それぞれの文化の中で生活してきた子どもたち。保育者は、すりあわせる時間もないなかでのスタートで、大きなストレスにさらされてしまった。保育の場で幼稚園・保育園に上下関係はあつてはならないと思うが、保育者はどのように連携するのか、対等に連携できているのかということも大きな問題となっていると思う。

平成一二年、幼稚園は東京都の管轄から各区へと移管されたが、恐れていたことが今現実になってきている。自治というだけで言えば、住民の意思を反映しやすいということ、二三区移管は良いことなのだと思うが、その反面、各区でんならばら、したい放題で歯止めのかない乳・幼児行政が始まってしまったように思う。

(渋谷・中幡幼)